

## 【第4部 創価スピリット 日顕宗を破す】

### 宗門事件の背景

創価三代会長の強盛な信心と使命感によって、創価学会は大きく発展を遂げていきました。戦後、数十年にわたる創価学会の真心の支援により、何百という末寺が建立され、大石寺も完全に新しく整備されるに至ったのです。また、創価学会は、著しく形式主義に傾き、権力体質をあらわにした宗門との「僧俗和合」に懸命な努力を重ねていきました。

宗門の僧侶たちが、僧の権威と伝統を保つことだけに汲々としていたのに対し、創価学会は人類の平和と幸福を願って、大聖人の誓願である広宣流布の達成を第一義としていたのです。広宣流布を使命とする活発な信徒団体の存在は、消極的で保守的な宗門にとっては、従来に従順な信徒像から大きくかけ離れたものであり、大変な脅威であったのです。

1970年代、80年代を通じて、学会の供養により、宗門の財政状態は極めて豊かになっていきましたが、世界的規模で発展を続けるSGIと池田先生に対する嫉妬心が極限にまで高まり、学会員を切り崩して寺側に付けようと企てる動きが顕著になってきました。

ついに阿部日顕法主らは、学会員を宗門に隷属させるために「創価学会分離作戦」(C作戦)を実行し、1990年12月、池田名誉会長を法華講総講頭から罷免すると通告してきたのです。更に、翌1991年11月、一方的に学会を「破門」という暴挙に出たのです。

その陰謀は失敗に終わりました。

宗門にとって最重要の事項は、「信徒と御本尊との間を取りもつために不可欠な仲介者が僧侶である」ことにあります。御書のどこにも見当たらない儀式や形式を強調することによって、信徒に僧への畏敬の念を抱かせ、従順させようとしたのです。とりわけ、法主に対する絶対的服従が信徒の信仰にとって最も重要であるかのように仕向けたのです。

それと対照的に、創価学会は、創価三代会長が身をもって示したように、御書を根本に、大聖人の御精神と教え通りに実践してきました。その勝利の実証は、「破門」以来、SGIは飛躍的な前進を遂げ、今や192カ国・地域でメンバーが嬉々として日蓮仏法の実践に励んでいる姿に如実に表れています。

以下、日顕宗の根本的な邪義を3点に要約して説明します。

## 日顕宗の3大邪義

### (1) 日顕宗の中心教義「法主信仰」

現宗門を、なぜ「日顕宗」と呼ぶのか。それは、日顕宗の教義が、法主を信仰の対象としているからです。

本来、法主とは、信行学の範となり、仏法を護持する存在でなければなりません。ところが、日顕宗が終始、主張しているのは、“法主は絶対であるから、ともかく法主に従え”という、一切の対話を拒絶して独善化を進める「法主絶対論」「法主信仰」です。

この法主信仰こそ、日蓮大聖人の仏法の三宝を破壊する大慢心の教義であり、日顕宗が最大の邪教と化した根幹の要因です。

たとえば、宗門の公式文書には次のようにあります。(宗門の機関誌に掲載された、いわゆる「能化文書」)。

「唯授一人の血脈の当処は、戒壇の大御本尊と不二の尊体にまします」「この根本の二つ(=御本尊と法主)に対する信心は、絶対でなければなりません」

これほどの前代未聞の邪義はありません。法主が大御本尊と不二の尊体であるとは、法主を絶対なるものとして礼拝し、信仰せよということです。これは、本来、御本尊をお守りする役割である法主が、その役割をわきまえず、尊極の法体である御本尊と同等の地位にまでのし上がった教義にほかなりません。

### 「御本尊根本」こそ正しい信心

日蓮大聖人は「此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし」(御書 1124 ㊦)、「無二に信ずる故によつて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり」(同 1244 ㊦)等と仰せです。

また、日興上人も「唯御書の意に任せて妙法蓮華経の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊(=大聖人御自身が認められた御本尊)是なり」(同 1606 ㊦)と述べられています。

「御本尊根本の信心」こそが、大聖人・日興上人以来の正しい信心です。その御本尊に対して、法主を加えて「根本の二つ」とすることは、大聖人・日興上人のお心に背く邪義であることはいうまでもありません。

### 法主の絶対視は大聖人・日興上人に違背

「日興遺誠置文」には、次のようにあります。

「時の貫主為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」  
(同 1618 ㊦)

この遺誡は、たとえ法主であろうとも仏法から逸脱して、自分勝手な主張をする場合は、それを用いてはならないと断言されているものです。また、この仰せからうかがえるように、日興上人は、後代の法主が誤りを犯すこともありうると想定されていたのです。

この「遺誡置文」に照らしても、法主を絶対視することは、大聖人・日興上人に完全に違背した邪義であることは明白です。

## (2) 日顕宗の神秘的血脈の嘘

日顕宗で法主が絶対であるとする考えが生じているのも、もともとは、前提となる血脈観が誤っているかにほかなりません。

すなわち、前の法主から「血脈相承」を受けるだけで、仏の内証の悟り、法体が次の法主へ伝えられるとする“神秘的”な血脈観のことです。

先の「能化文書」には、「唯授一人の血脈法水は、まさに人法一箇の御法体です」などと記されています。

しかし、このような“神秘的”な血脈観も、後の時代の者が、法主の権威を主張するために作ったものであり、大聖人、日興上人の教えとは無縁の邪義です。

大聖人の仏法における血脈とは、本来、一切衆生に開かれたものであり、一部の者が独占するものではありません。

### 「血脈」の本義は万人に開かれた「信心」

大聖人御在世当時の日本仏教界では、「血脈」の名のもとに、ごく一部の閉ざされた人間だけに仏法の奥義なるものが伝わるとする「秘伝主義」が横行していました。

それに対して大聖人は、「生死一大事血脈抄」に「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとする」(同 1337 ㊦)と仰せになり、成仏の血脈は特定の人間のみが所持するものではなく、万人に開かれるものであることを明確に示されています。

そして、大聖人の仏法においては、「血脈」といっても、結論は「信心の血脈」という表現にあるように「信心」のことです。

これに対して、相承されれば、信心、実践と関係なく、そのまま仏であるとする日顕宗の特権的・神秘的相承観は、「信心の血脈」という血脈の本義を破る邪義以外のなにものでもありません。

### (3) 「僧俗差別主義」の時代錯誤

日顛および日顛宗の僧侶に共通しているのは、“僧が上で信者は下”という、信徒に対する抜きがたい「差別思想」です。

たとえば、日顛が平成2年(1990年)に学会を切ろうとした際に「20万こっちにつけばいい」と語っていたことは有名です。その20万というのは、自分たちが贅沢三昧する生活を続けるための人数です。こうした発言自体、信徒の幸福を全く考えていないことを物語っています。

言うまでもなく、こうした信徒蔑視の思想は、日蓮大聖人の仏法に存在するわけがありません。

大聖人は「此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ」(同 1134 ㊦)、「僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり」(同 1448 ㊦)と、明確に僧俗の平等を説かれています。

僧俗ばかりか、すべての人間の平等こそ法華経、大聖人の教えの根幹をなす思想です。仏法上の師匠と弟子の関係も、「師弟不二」の原理に示されているように、相互の尊敬と信頼のもとに、共通の責任と決意をもって広宣流布へ前進していくことを意味しています。

しかし、宗門では師匠とは単に事務的な立場や役職で決められ、信徒を意のままに扱う権威の象徴にすぎないのです。このように「僧俗差別主義」は大聖人の人間主義の仏法を冒瀆する時代錯誤の誤った思想なのです。

(*Living Buddhism*, March-April 2010, pp. 90-94, 大白蓮華 09年10月号)